

教育相談における WISC-IV 知能検査の活用について ～多動性・衝動性のある児童の教育相談～

松田昭憲

The Use of WISC-IV Intelligence Test in Educational Consultation ～Educational Consultation for Hyperactive and Impulsive Children～

Akinori MATSUDA

I 研究目的と意義

WISC-IV 知能検査は、小学校の教育相談において、有効なツールとして活用されている。それは、この検査が様々な「困り感」を抱えている児童の認知能力を、細かく分けて評価することが可能で、児童の「得て不得手」や「力の偏り」を分析できること、また、その結果をグラフとして視覚化することが可能であり、保護者や学校教職員への実態の理解に有効に活用できるからである。

今回は、多動性・衝動性の傾向が見られる児童を対象として検査を行い、実態を把握し、その実態に応じた支援について検討したい。また、実態によっては、学校だけの支援では児童への適切な支援につながらない場合も考えられる。その場合、医療機関との連携も探る必要がある。しかし、保護者にとって、医療機関の受診については、様々な感情が生まれ、服薬への強い拒否感をもたれる場合も少なくない。

そこで、本研究では、検査結果を分析することで、児童の実態を分析し、その結果をグラフとして視覚化して提示することで、保護者や学校関係者に実態とそれに応じた現状での支援について理解を深め、必要がある場合は、保護者に医療機関への相談につながるような「教育相談」について検討したい。

II 研究方法

1. WISC-IV 知能検査を用いた調査

各学校に研究依頼を行い、各学校からの検査依頼の提出を受けて WISC-IV 知能検査を実施する。また、「子どもと教師のための実態把握シート」により、児童の行動面・学修面での「困り感」を確認する。検査後は学級担任等の面談で得た情報も活用しながら検査結果を分析し、学校現場で活用できる具体的支援策を報告書としてまとめ、保護者と学級担任及び特別支援教育コーディネーターと協議しながら教育相談を実施する。また、必要がある場合は、保護者に医療機関の受診についても促す。

2. 倫理的配慮

保護者及び児童の在席する学校長に、研究趣旨と研究参加による不利益のないことを「WISC-IV 知能検査による、配慮や支援を必要とする児童・生徒の具体的支援の検討」研究の説明文書”

にて説明した。更に、“「WISC-IV知能検査による、配慮や支援を必要とする児童・生徒の具体的な支援の検討」研究の同意書”を保護者と学校長の提出により、同意が得られたものとした。そのデータは筆者が厳重に保管し、記述した内容から個人が特定できないよう連結不可能匿名化した。また、本研究は宮崎学園短期大学研究倫理審査会の承認を受けている（承認番号 2021008）。

3. 主訴

学力は同年齢とほぼ同様の力であるが、多動性・衝動性があり、落ち着いて学習に取り組むことが困難である。そこで、今回の心理検査により、本児童の得手不得手を分析することで、今後の学校や家庭での支援につなげていきたい。

4. 児童の実態

児童の実態を把握するため、A教育委員会が提案している、「子どもと教師のための実態把握シート」を活用した。このアセスメントシートは、①学習面に関する困難を調べる項目、②行動面に関する困難を調べる項目（「不注意」、「多動性－衝動性」）、③行動面に関する困難を調べる項目（「対人関係やこだわり等」）の3つに分かれている。今回は、アセスメントシートの②行動面に関する困難を調べる項目（「不注意」、「多動性－衝動性」）Table 1〈アセスメントシート②〉から、多動性、衝動性の傾向を見ることにした。まず、設問群「不注意」合計 6 ポイント、「多動性－衝動性」合計 5 ポイントである。このアセスメントは合計 6 ポイント以上で「著しい」と判断されるので、不注意傾向、多動性・衝動性が著しく高いと考えられる。

行動面に関する項目（その1）

- ・評価の（A,B,C,D）段階に沿って○を付けてください。

A（ない、もしくはほとんどない）…0点	B（ときどきある）…0点
C（しばしばある）…1点	D（非常にしばしばある）…1点

- ・設問群ごとに合計得点を出す。→少なくとも1つの群で合計得点が6ポイント以上なら、「不注意」または「多動性－衝動性」の問題を著しく示す、と考えられる。

※「不注意」「多動性－衝動性」に関する各9項目、計18項目から構成される。

設問群	質問項目	評価段階
不 注 意	1 学業において、綿密に注意することができない、又は不注意な間違いをする。	A B C D
	2 課題または遊び活動で、注意を集中し続けることが難しい。	
	3 直接話しかけられたときに、聞いていないように見える。	
	4 指示に従えず、課題や役目をやり遂げることができない。	
	5 課題や活動を順序立てることが難しい。	
	6 （学業や宿題のような）精神的努力の持続を要する課題を避ける。	
	7 課題や活動に必要なものをなくしてしまう。	
	8 気が散りやすい。	
	9 日々の活動で忘れっぽい。	
「不注意」の合計（ ）ポイント		
多 動	1 手足をそわそわと動かし、または、椅子の上でもじもじする。	A B C D
	2 教室や、その他、座っていることを要求される状況で席を離れる。	

性 衝 動 性	性	3 不適切な状況で、余計に走り回ったり、高いところへ上がったりする。	A B C D
		4 静かに遊んだり、余暇活動をしたりすることができない。	
		5 じっとしていない、または、まるでエンジンで動かされているように行動する。	
		6 しゃべり過ぎる。	
	衝	7 質問が終わる前に、出し抜けて答え始めてしまう。	A B C D
	動	8 順番を待つことが難しい。	
	性	9 他人を妨害したり、邪魔したりする。	
[合 計]		「多動性」の得点・・・・・・[点]	
		「衝動性－衝動性」の得点・・・・・・[点]	

Table 1 〈アセスメントシート②〉

5. 検査時の様子

学級担任と一緒に入室する。いきなり検査の課題に取り組もうとしたが、まず、いくつかの質問を行い、正確に答えるので検査に入った。

検査には、初めはかなり興味を示し、検査器具を何度も触ろうとする。課題2の終了後に休憩を求めるなど、直ぐに検査に飽きた様子があった。休憩し検査を再開するが、拒否感無くスムーズに課題に取り組んだ。しかし、5分もたたずにトイレに行きたいと訴え、その後、頻繁にトイレ休憩を求めた。課題5からは離席が頻繁にあり、落ち着かない。特に言語性課題では椅子から離れ動き回った。しかし、課題「算数」では、離席しながらも解答した。聞いていないようで聞いている。動作性課題になると椅子に座り集中した。しかし、検査開始から30分を過ぎた頃には、検査が最後までできるか心配になるほど落ち着かない。そのため、検査後半はかなり急いで課題を実施した。そのため、検査の妥当性がやや低くなったと考えられる。

III 検査結果

今回実施した、WISC-IV知能検査の結果について、まず児童の概観を示す全検査からはじめ、合成得点プロフィール、評価点プロフィールと徐々に細かく分析を行った。

1. 全検査 IQ について

検 査 結 果	記 述 分 類
全検査IQ (FSIQ)	非常に低い - 低い (境界域)
言語理解指標 (VCI)	低い (境界域) - 平均の下
知覚推理指標 (PRI)	低い (境界域) - 平均の下
ワーキングメモリー指標 (WMI)	非常に低い- 平均の下
処理速度指標 (PSI)	低い (境界域) - 平均

Table 2 WISC-IV検査結果表

Table2WISC-IV検査結果表と、Fig. 1 合成得点プロフィールに示したように、全検査IQは「非常に低い - 低い (境界域)」であり、全般的な力は同年齢に比べて低いことを示している。しかし、検査時の様子で記載した通り、かなり落ち着きがなく、本来の力を発揮したとは考えにくい。

そのため、この結果の妥当性は低く、これ以上の力であると考えることの方が妥当性が高い。

2. 合成得点プロフィールについて

Fig. 1 合成得点プロフィールから、「言語理解」「知覚推理」「ワーキングメモリー」が「境界域」で同じ域である。また、「処理速度」も「平均の下」の域で大きな差は無く、全体的にはバランスがとれた状態を示している。

3. 評価点プロフィールの結果

(1) 言語理解 (VCI) について

Table 2 言語理解 (VCI) に示したように、言語理解全体では、「境界域」であり、同年齢に比べて低い力を示している。詳細に見ると、「類似」「理解」が平均に比べて低く、言葉による思考や概念形成の力が同年齢に比べて低くでている。特に「理解」では、解答が部分点までいかない状況であり、浅い知識となっている。

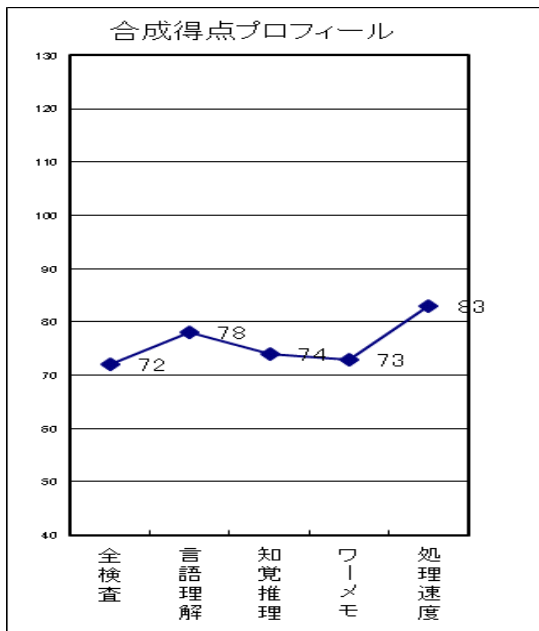


Fig. 1 合成得点プロフィール

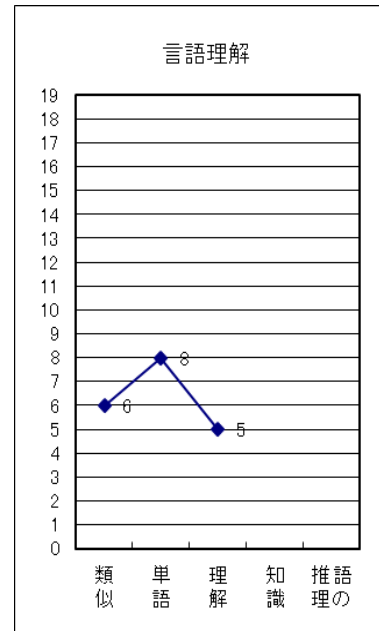


Fig.2 言語理解 (VCI)

※言語理解 (VCI) の検査項目「知識」と「語の推理」は、他の項目の検査が信頼性が高いということで日本版 WISC-IV実施・採点マニュアル (日本文化科学社) の規定により実施しなかった。

(2) 知覚推理 (PRI) について

Fig.3知覚推理 (PRI) から、知覚推理全体では、「境界域」であり、同年齢に比べて低い力を示している。詳細に見ると、「絵の概念」が低く出ている。これは、視覚情報による2つの共通性や概念形成の力が同年齢に比べて低いと考えられる。一方、「積木模様」「行列推理」は「平均の下」の域であり、図形の理解等の空間認知や視覚による法則性の理解は同年齢に比べてやや低い力と考えられる。

※知覚推理 (PRI) の検査項目「絵の完成」は、他の項目の検査が信頼性が高いということ

で日本版 WISC-IV実施・採点マニュアル(日本文化科学社)の規定により実施しなかった。

(3) ワーキングメモリー (WMI) について

Fig.4ワーキングメモリー (WMI) から、ワーキングメモリー全体では、「境界域」であり、同年齢に比べて低い力を示している。詳細に見ると、「数唱」「語音整列」が低く出ている。これは、聴覚的短期記憶や作業記憶の苦手さであり、現状では、長く複雑な文章の理解と表現する力が低いことが考えられる。一方、「算数」は「平均の下」の域であり、数的思考は同年齢と同様の力と考えられる。

(4) 処理速度 (PSI) について

Fig.5 処理速度 (PSI) から、処理速度全体では、「平均の下」の域であり、同年齢よりもやや低い力を示している。詳細に見ると、「符号」「記号探し」が低く、視覚的短期記憶は良いが手指の不器用さがあり、漢字を書いたり視写したりすることの苦手が考えられる。一方、「絵の抹消」が平均より高く、集中した時の力の高さがうかがわれる。

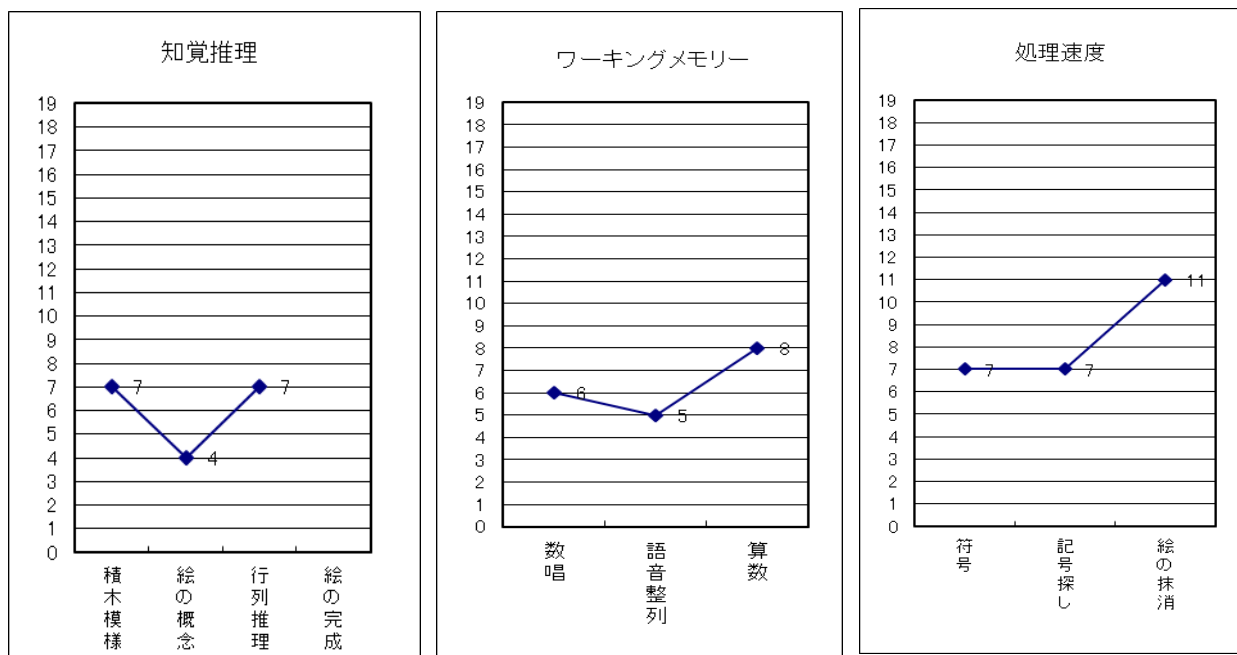


Fig.3 知覚推理 (PRI)

Fig.4 ワーキングメモリー (WMI)

Fig.5 処理速度 (PSI)

IV. 考察

以上の検査結果から、以下のような本児の実態と学校での支援の方向性が考えられる。

1. 数的思考は同年齢と同様の力であり、集中した時の本来の力はずっと高いことが充分考えられる。
2. 言葉による思考や概念形成の力が低く、現状では浅い知識となっている。
 - ・ 浅い知識となっているのは、落ち着いて、「聞く」「考える」ことができないことが積み重なったことが理由と考えられる。そのため、落ち着きを取り戻せる環境を準備することが求められる。
 - ・ 視覚的聴覚的な環境の整理をする。

- ・ 宅習は、居間ではなく個別の部屋で行う。
 - ・ 学習の課題は、小まめに分けて提示する。
 - ・ 15分に1回程度、体を動かす活動を取り入れる（背伸び、お遣い等）。
 - ・ じっとすることは困難なので、貧乏ゆすりのように自己刺激がある状況を認める。
 - ・ 細かく注意せず、ある程度の余裕をもって対応し、ストレスがたまるのを予防する。
※ストレスが溜まるとチックにつながる可能性がある。
 - ・ 何か始めるときは挙手してから行う。…ルールづくり。
 - ・ 衝動的な行動の後は、悪気がないと考えられるので、怒らず、落ち着いて注意する。
 - ・ 声かけの基本は、①低い声で、②ゆっくり、③三語文で、④正しい行動を指示する。
 - ・ 説明する時は、「今から説明するから聞いてね」と前置きする。
 - ・ 隣で頑張っている子どもを褒めて本人の注意を促す。
3. 聴覚的短期記憶や作業記憶の苦手さがあり、現状では、長く複雑な文章の理解と表現する力が低いと考えられる。
- ・ 説明や指示は、「簡潔に、短く」、「教科書を出します」といった三語文程度にする。
 - ・ 「算数の教科書を出して…出しましたか？ 教科書の 42 ページを開いて…開きましたか？ 問題5をしましょう！」と一つの指示で一つの行動「一語一行動」で指示する。
 - ・ 「今から3つのことを言います」と予告する。
4. 手指の不器用さがあり、漢字を書いたり視写したりすることの苦手が考えられる。
- ・ 大きなマスを活用する。
 - ・ 「書く」量と時間を調整する。
 - ・ 折り紙やあやとり模型作成等、手先を使って 楽しく遊べる 活動を取り入れる。
5. 落ち着いた環境が準備されることで、本来の力を発揮できることが考えられる。また、今後、落ち着いた環境が継続されることで、浅い理解から深い理解へと導き出され、今後の学習効果が一層上がることが期待できると考えられる。

V. 今後の課題

この検査結果は、検査時の様子で述べたように、かなり落ち着きがなく、衝動的に解答する場面が多く、児童の能力を反映していないことが十分考えられる。そのため、「落ち着いて課題に取り組んだら」という仮定で補正した。特に算数では、簡単な課題でミスするが、その後のそれよりも困難な課題に正解する等の様子が見られた。これは、文章が複雑な課題になると、単語に衝動的に反応し解答するため、文章を深く理解せずに不正解となったと考えられる。このことから、数的思考の力が低いのではなく、衝動的に解答した結果と判断し、落ち着いて解答し本来の力を発揮した場合は、簡単な課題は正解するとして補正を行った。

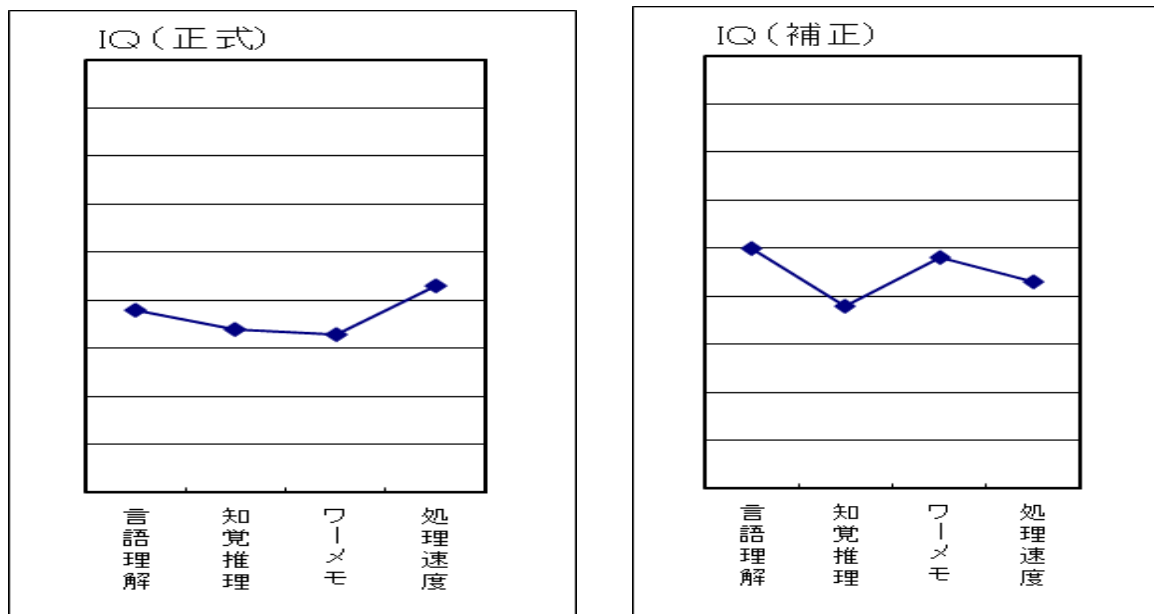
補正の粗点を表したものがFig. 6 補正表である。この粗点を基に補正合成点プロフィールを作成し、正式のグラフと並列に提示し、教育相談を行った。その資料の部分を抜粋した。

検査項目	粗点	
	正式	補正
類似	6	9
単語	13	15
理解	5	8
絵の概念	5	7
行列推理	12	14
数唱	10	13
語音整列	7	9
算数	15	18

Fig. 6 補正表

資料1 保護者説明資料からの抜粋

今回のIQ補正は、多動性・衝動性を考慮して補正したものです。正式のデータに比べて、部分的に評価点が高くなります。



以上のように、正式と補正のグラフを併記することで、正式グラフが現状の力であり、現在の多動性・衝動性がある状況での力である。一方、補正グラフは持っている本来の力であることを保護者に理解させ、その差が大きいことやこのまま落ち着いて学習に取り組めない場合は、浅い理解となり、今後の学習の積み重ねに影響することを説明した。

教育相談後、学校職員と保護者との面談後、早々に保護者が病院受診の予約が取れたと学校から連絡を受けた。このことは、今回の教育相談で、学校による構造化や環境の整備、支援の在り方の効果だけではなく、医療の力を借りて多動性・衝動性の対応する必要があることを保護者と学校職員が理解されたと考えられる。

このことから、WISC-IVの検査結果から作成されるグラフを有効に活用することにより、学校での具体的支援の検討で終わらず、医療機関に繋がったことは成果である。しかし、服薬や診断名がつくことへの抵抗感が強い学校職員や保護者は少なくなく、今回のように、検査結果をグラフという視覚支援を活用することは、学校職員や保護者の児童の実態の理解に効果があることが推察される。しかし、このWISC-IVのグラフは保護者や学校に提示できるものが限られている。Fig.1 合成得点プロフィールは提示できるが、Fig.2 言語理解 (VCI)、Fig.3 知覚推理 (PRI)、Fig.4 ワーキングメモリー (WMI)、Fig.5 処理速度 (PSI) は、専門家であるドクター又は臨床検査士のいる機関に限られている。そのため、学校での教育相談では提示できず、保護者や学級担任、特別支援教育コーディネーターには示されず、検査による分析結果を伝えるのにグラフが活用できない現状である。今回は、その限界の中でのグラフの活用となったが、それでも医療機関に繋ぐ効果を得た。そのため、今後は、WISC-IV知能検査が教育相談に更なる有効なツールと活用できるためにも、1つ前のWISC-III知能検査がそうだったように、必要なグラフ、データが少なくとも、特別支援教育の専門家である、特別支援教育コーディネーターが活用できるように

改善することが今後の課題と考える。

VI. 参考文献

- 上野一彦、梅津亜希子、服部美佳子編 [2005] 軽度発達障害の心理アセスメント WISC-Ⅲの
上手な利用と事例 日本文化科学社.
- 上野一彦、藤田和弘、前川久男、石隈利紀、大六一志、松田修 [2010] 日本版 WISC-IV実施・
採点マニュアル 日本文化科学社.
- 上野一彦、藤田和弘、前川久男、石隈利紀、大六一志、松田修 [2010] 日本版 WISC-IV理論・
解釈マニュアル 日本文化科学社.
- 榊原洋一・佐藤暁著 [2014] 発達障害のある子のサポートブック 学研
- 月森久江編集 [2006] 教室でできる特別支援教育のアイデア 中学校編 図書文化.
- 月森久江編集 [2006] 教室でできる特別支援教育のアイデア 中学校・高等学校編 図書文化.
- 月森久江編集 [2008] 教室でできる特別支援教育のアイデア 小学校編 Part2 図書文化
- 月森久江著 [2018] 発達障害のある子のケース別サポート実例事典 ナツメ社.
- 藤田和弘、上野一彦、前川久男、石隈利紀、大六一志編著 [2005] WISC-Ⅲアセスメント事例
集 ー理論と実際ー 日本文化科学社.